

進藤 有夏（大阪教育大学附属池田中学校一年生）

『なぜ出ないんだ』

嵩典は叫んだ。彼の全身は熱を帯び、

手のひらは汗で濡れた。

松本は今どこに――』

その時、車内に駅員さんのアナウンスが流れた。私の下車駅の名前を告げている。私は本を閉じ、電車から降りた。

「いいところだったのになあ。」

最近、私は小説を読むことにはまっている。好きな作家さんがいて、その人の本ばかり買っている。受験勉強で忙しくて本が読めなかった分、今はひたすら読んでいる。夏休みに入り、新しい本を買い始めたのだが、九月半ばにはもう五冊も読んでしまった。総ページ数は一五〇〇ページにも及んでいた。しばらく本を読んでいなかった私の基準からすると、「詠みすぎ」に該当する。でも、面白くてやめられない。

なぜ、読みふけてしまうのだろう。多分、筆者の「技」がこめられているからだ、と私は思う。もし仮に、「こういうストーリーで小説を書く」といった内容の同じ説明をうけてから私と作家さんとで小説を書いても、作家さんに匹敵するような作品は私には書けないはずだ。私は読者をひきこむような「技」を知らないし、小説を書いたためしもないからだ。

じゃあ、その「技」とはどういうものなのか？家に着いてから、そのことを意識して再び小説を読みすすめている。全部読んでも、読み返していく。

そうこうしていて、ふと思っただのは擬態語が多いのではないか、ということだ。適当に選んだページには六つもの擬態語があった。擬態語をかくして読んでみると、無いよりもある方が話にのめりこみやすかった。

言葉だけに限らず、同じ意味の言葉でも、様々な表し方がある。例えば、「こんにちは」なら「コンニチハ」「ハロー」「こんちは」など、色々な言い方・表し方がある。そこから、この登場人物達は親しい仲だ、とかかたくるしい、とかかといつたように雰囲気や印象を変えることができる。他にも、「コンティニュー」を「CONTINUE」といったように、いきなり英語を混ぜてしまってもおかしく感じない。

考えてみれば、日本語は表現力に富んでいる。ひらがなにカタカナ、漢字、ローマ字、英語まで混ぜられる。それだけでなく、言葉の種類もとても豊富だ。「オノマトペ」(擬態語および擬声語)では「Crunchy」という英語と同じ意味を目指す日本語は「かりかり」「ほりほり」「ぱりぱり」「ぢゅぢゅ」と、その多さは歴然としている。

普段使い慣れている言葉だからか、日本語にこんなにも長所があるなんて、気が付かなかった。英語やフランス語をペラペラ話す人を見て、「かっこいいなあ」と思っているばかりだったが、日本語にもこんなにたくさん『魅力』がある。今まで私が夢中になって読んでいた小説も、日本語であってこそだったのかもしれない。違う言葉だったとすれば、ここまでひきこまれなかったということも考えられる。

そう思えば、日本語が改めて誇らしいものに思えてきた。私の母国語は、表現力にみちあふれた自慢の言葉。

私はこれからも小説を読む。日本語の長所をもっとよく知っていくために。その意思を胸にしまい、私はこうも本を開いた。